

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 06 月 01 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520141

研究課題名（和文） 視覚的群衆演出の成立 ドイツ・ワイマール期の表象芸術

 研究課題名（英文） Visual representation of the crowd ---- Art of the Weimar Republic
 Visuelle Inszenierung der Masse ---- Darstellungskunst der Weimarer Zeit

研究代表者：

山本順子 (YAMAMOTO, Junko)

愛知県立大学・外国語学部ヨーロッパ学科・教授

研究者番号：80295576

研究成果の概要（和文）：美学的群衆論の試み。19 世紀後半からファシズム期にかけて、崇高美学と歴史的集合記憶に対する批判的形象の確立に向けて、複製技術による視覚的表象分析と言語芸術における人称意識を検証する。

研究成果の概要（英文）：An approach to the aesthetic representation of crowd during the Weimar Germany. An Analysis of figurative use of the collective memory and sublime image toward a topography of the national identity.

Ästhetik der Massendarstellung. Analyse der Sichtbarmachung der nationalen Identität und des Selbstbewußtseins durch den Vergleich mit dem wissenschaftlichen Hintergrund um Jahrhundertswende.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：人文学・芸術学

キーワード：表象文化論

1. 研究開始当初の背景

群衆の研究はこれまで、社会的階層としての大衆論や行動心理学論など、現象の観察を中心としたアプローチがなされてきた。

1) ル・ボン、フロイトらの人間の心性を中心としたもの。批判的な立場から、その都度様々な動機から起こる非理性的な行動を分析。

2) 市民革命から全体主義にいたる政治行動

の歴史的検証。特にワイマール共和国がファシズムをもたらした大衆操作研究。

3) スペクタクルという劇場的群衆行動。具体的には、王権などの視覚的権力構造の演出や軍事パレード及びスポーツ祭典といった、集団鑑賞の形態検証。

2. 研究の目的

1) 美学：崇高論の持つ意義、あるいはそれに対する批判を歴史的にたどることによって、

美的作用の価値が政治的に利用されていく過程をたどることを目指す。

2) 造形芸術: 様式化の系譜をたどる。ブルジョア美学から国民芸術への変遷を、その規模やモチーフの観点から読み取る。ワイマール期のドイツ映画の特徴に **Massenregie** が挙げられるが、前世紀の集団演出や自然主義演劇との繋がりを明らかにする。映画はまた、集団鑑賞の形態をとるが、初期映画論を検証することで新しい受容美学の萌芽をここに見出すことができよう。博覧会と同根の国際美術展という受容の仕方についてもその意義を確定する作業を行う。

3) 言語芸術: **Moderne** の作品の特徴である人称の問題を、神話的言表及び主体の分裂、崩壊、否定などの実験的試みの表れとみて、それによって浮かび上がる新たな集合的主体の表象を分析する。

3. 研究の方法

資料収集: 映画・演劇パンフレットなど入手困難な時代の証言は、州立図書館でコピーする。ワイマール期の映像作品については、可能な限り DVD など画像分析する。その際群衆の性質、構図、動きなどに留意する。

文献整理: 資料の PDF 化をし、キーワードを付して目次とは別に整理する。

言説の分類: 世紀転換期の文学作品において、言語作品における話者の人称、語られる現実のあり方、叙述の質に留意して分析する。また、同時に作者の言語観を把握する。

4. 研究成果

[概説および諸論文の内容との関連]

19世紀は、近代化がすべての領域で為し遂げられた時代である。個としての人間の捉え方を分類してみると以下ようになる。この時代の特徴は、主体の確立と同時にその反対の傾向、すなわち多様な個人の均一集団化への収斂もまた進んでいたということである。

a) 政治的主体 (市民革命) → 革命

b) 生産の主体 (産業革命) → 大量生産

c) 教養小説における主体 (創造の主体) → マス・メディア

a) については論文 3) 「複製技術時代の崇高——集団身体のアウラの現前に抗して」にて、

フランス革命に端を発している集団研究、エドモンド・バークの諸著作を分析、崇高の政治的意味を問うた。また受容美学の実験的追究の一例として論文 1) 「托卵の兎——ベネチア・ビエンナーレのシュリンゲンジーフ館」にて、シュリンゲンジーフの演出作品およびインスタレーションを具体的に分析した。また、「ドクメンタ (13) ——場の歴史の経験不/可能性について」(10月刊行雑誌掲載決定) では歴史への意識的アンガージュマンを美的形象として構築する可能性について考察した。

b) については論文 2) 「Geflügelte Diskursmaschinerie. Alexander Kluges „Der Luftangriff auf Halberstadt am 8. April 1945“」にて、生産関係の上に立つ合理意識がもたらす言説の影響が 20 世紀の戦争を如何に変化させたかを考察した。

c) については、論文「神話と主体——「集団」の精神分析と言語芸術」(未刊、土屋勝彦編『フロイトと文学』所収予定)にて、近代の主体の自明性が、世紀転換期に疑問に付され、認識のあり方が転換したことを具体例とともに指摘した。

[研究成果: 集団の形象]

(1) 言語芸術と集合意識

フロイト集団心理学とモダニズム文学ディスクールと言語的共通地盤の指摘

① フロイトの意義検証

・「個人心理学は社会心理学でもある」

精神分析学は、19世紀ブルジョワの主体幻想の上に成り立っているという批判があるが、その深層心理の発見は、20世紀の大衆社会においても意義を持つ。フロイトの 1921年の論文、**Massenpsychologie und Ich-Analyse**で、彼は個人心理学と集団心理学の違いを越える論考を試みる。ここで重要なのは、ひとりの人間の社会化の過程における内面の発達が如何なる根拠で集団に応用できるかという点である。

・「集団は衝動的で、変わりやすく、刺激されやすい。集団は無意識によって動かされている。」

集団の抑制のなさは、個人の発達の初期状態、すなわち幼児の心性であり、これをフロイトが未開人に繋げることの中にダーウィンの影響をみて、時代に共通する問題意識を指摘。

・「集団の心理とは最古の人間心理である。」

フレーザーに代表される文化人類学もまた同時代の古層の再評価、人類共通の祖を文化に求めているとみなすことができる。フロ

イトのトーテム信仰の分析に影響を与えている。エディプス・コンプレックスが原父の殺害という古層に繋がるのだ。

・「神話とは、個人が集団心理から踏み出る一歩を標すものである。」

フロイトの集団論は『トーテムとタブー』から「文化への不満」、『モーゼと一神教』などへ至る過程で重要な位置にある。共同体が成立する上で起こる抑圧は人類共通の神話として言説化される。

② ダーウィン

・民族心理学

種としての人間のあり方を決定づけたもうひとつの重要な要素はダーウィンの『種の起源』である。自然科学の原理が人間の精神的発達にも応用して導入されることになる。特にスペンサーなどの進化論的心理学は集団心理学に加えて民族心理学を求めている。それは神話と国民を考古学的にだけでなく、精神的に結び付ける根拠としてはたらくのだ。

・「個体発生は系統発生を反復する」

ヘッケルのこの生物学的テーゼをフロイトは自らの個人心理学と集団心理学の関連づけの根拠に利用する。

➡現在の主体とは別の複数の主体のあり方の意味表現が抑圧されている。

③ 消滅する主体——モダニズム文学の人称

・労働者集団のふるまい

一九世紀後半、ゾラやハウプトマンの自然主義文学が描写の対象に見出した、新しい人間としての搾取された労働者の力強い集団の抗議。

・「大都市の群衆は、それをはじめて目の当たりにした人々の心に、不安、嫌悪、戦慄を呼び起こした。」

モダニズム作家たちの言語的表現に対する懐疑とは、主体の解体、分裂と個としての主体を持たぬものの描写実験を併せ持つものである。

・「集団的メタ主体」

マーティン・ジェイはベンヤミンの「主体なき経験」を言語的神話性の追究とみる。

・「主体/客体という二項対立を越える経験をベンヤミンが求めたことを、二〇世紀の芸術家たちが同じものを求めた数多くの事例のなかに据えてみるのも実り多いかもしれない。」

具体的には、体験話法という文体論、中間態という文法論、メディアによる自動的記憶固定、バフチンのカーニバル論、ホロコーストの歴史的語りなどに関連づけることが出来る。

・「浮遊するパースペクティブ」

ジュディス・ライアンのドイツ、モダニズム文学の系譜論での指摘はさらにメタ主体の表象問題に繋げることが出来る。ムージル、ヘンリー・ジェイムスなどの話者の問題がそれにあたることを検証。

・「わたし」のなかにある近代的主体

体験話法が「ボヴァリー夫人」の中に指摘され、これが言語学的、心理的問題となったことの時代性に注目。語りの揺れは不特定多数という神話的話者へと繋がる。

・『『生きられた神話』がまさに私の小説の叙事理念なのです」

トーマス・マンの『ヨーゼフとその兄弟』において、個性や一回性を越えた生のありかたをめざした神話的語りを目指されていることを指摘。

➡経験主体の単独、均一といった概念の崩壊が人称の問題にみてとれる。

④ ディスクールの暴力

・合理的理性と野蛮

アドルノの「啓蒙の弁証法」が示すように、大量殺戮の野蛮は、文明化の進展の結果であり、集団の効率的組織化の成功による。

・組織化の頂点に立つ主体の書字行為

書くことと組織的爆撃の共通性を指摘。組織の頂点に立つものの机上で行われる攻撃計画は、記号的操作で攻撃目標の抹殺がなされる。

・空飛ぶ産業プラント

空襲という攻撃形態がマルクスの描いた産業構造による合理化を基盤とした労働活動の変種であることを指摘。すなわちそれは集団の効率的組織化の賜物である。

・上空から対象を把握する Sprachgitter

対象を把握すること、言語的表現にもたらずこと、これが爆撃パイロットの対象把握と共通性を持つことを指摘。

➡書字行為の持つ合理的組織化と多人数支配が近代の問題性に繋がる。

(2) 美学の政治化

視覚化された政治的身体の民主主義的集合が美的に作用することを検証

① 崇高論批判

・フランス革命時の群衆の熱狂

崇高論で知られるエドマンド・バークに革命群衆の観察結果を伝える書『フランス革命の省察』があることに着目、崇高と熱狂がファシズムに至る過程を追う。

・ル・ボン、タルド、ルフェーブルによる革命群衆論がなす、集合体の定義

暗示による熱狂の伝染はフロイトによっ

て疑問視され、集団理想による同一化作用の結果であると分析されている。フロイトの集合体の典型例はしたがって、革命群衆ではなく、軍隊とキリスト教会といった、指導者を頂点としたヒエラルキー構造を持つ。

・マルクスのイデオロギー批判「19世紀の社会主義革命の詩学」

フランス革命後の19世紀の革命群衆のふるまいを批判した『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』において注目されるのは、革命の形象が反復される美的作用を持つことである。

・ブルジョア革命の「ドラマチックな効果」アレゴリーとしての革命を批判すること。それがマルクスによる、真の社会主義革命の追求につながる。

・hic et nunc「いま、ここ」の政治学
ヘーゲルの歴史的同時代性への着目は、新たな精神を発現させる政治的集合体を想定している。

➡イデオロギーの持つ美的反復性を打ち破る断絶に歴史的進展の可能性が存する。その際、崇高は反復される形象として、そして逆に中断の瞬間に出現するものとして区別されねばならない。

② 全体主義美学批判

・「経済でいえば商品の具体的形態に相当する凝集状態と同じような、人間集団の凝集状態」

ベンヤミンの批判: アウラの喪失した時代の人間集団の有り様が、物神崇拜の価値観の支配下にあることを確認。

・彼らは媚集衝動と反射的行為とを同時に自由に任せてしまうのだ。

全体主義が「Massendasein 集団存在を美化」していること、その美的形象を具体的に指摘。

・カネッティ、ブロッホによる群衆論
全体主義の反省。群衆の分類を通して行動様式や原理などを分析。

➡生産のあり方が存在のあり方を決定する。その際、生産手段すなわち複製技術が問題となる。

③ 複製技術時代の映像

・神話体験としての群衆演劇

ギリシア悲劇は一九世紀末にヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフの訳などで蘇り、上演された。また、古典作品だけでなく、新作も試みられた。マイニング劇とよばれる群衆演劇、コロスを再導入した集団演出法など、従来個人的主体としての登場人物という演劇とは異なる形態の演劇がつけられたりもした。

・ルビッチ『デュバリー夫人』(1919年)

Massenregieの伝統に、戦後の混乱期の失業者増加もあいまってワイマール期のドイツ映画の一特徴となる。

・大衆は自分自身が映っているのを目にする。

映画館での集団鑑賞について、ベンヤミンは政治の美学化に抗する批判的受容の可能性を見ている。

➡俯瞰撮影からなる群衆シーンは政治的身体の美的表象に陥る傾向があり、ベンヤミンの批判は美的断絶を用いることによって効果的となり得る。

④ 受容美学

・ベネチアビエンナーレドイツ館のナチ様式の崇高

多数の観客を動員する鑑賞のあり方を分析。その際、1938年に改築された新古典主義的ナチ様式のパビリオンをめぐる態度決定が問題となる。

・反ファシズムの現代美術展、ドクメンタ
創造したりあるいは鑑賞したりする様々な経験主体からなる美的主体の集団を構成するための祝祭の場としての芸術展。

➡空間に累積している、個を超えた歴史の概念を芸術が媒介して、個としての身体と集団の記憶を関連させる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1) 山本順子、托卵の兎——ベネチア・ビエンナーレのシュリンゲンジーフ館、
日本独文学会東海支部編『ドイツ文学研究』
第45号、査読無、2012、79-84

2) Junko Yamamoto: Geflügelte
Diskursmaschinen. Alexander Kluges „Der
Luftangriff auf Halberstadt am 8. April
1945“
NEUE BEITRÄGE ZUR GERMANISTIK BAND 10,
HEFT 1, 2011, INTERNATIONALE AUSGABE VON
„DOITSU BUNGAKE“, 14-27, 査読有

3) 山本順子
複製技術時代の崇高——集団身体のアウラ
的現前に抗して
査読無
愛知県立大学紀要 43号 2011、211~227

[学会発表] (計0件)

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

0

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本順子(YAMAMOTO, Junko)

愛知県立大学・外国語学部ヨーロッパ学
科・教授

研究者番号：80295576

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：